Osaka University Knowledge Archive

Title	スピノザの社会哲学 : コナトゥスから救済へ、あるいはコナトゥスの彼方へ
Author(s)	河村, 厚
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44120
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【2】

氏　　名	河村　厚（かわむら　こう）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　17266　号
学位授与年月日	平成14年9月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科哲学哲学史専攻
学　位　論　文　名	**スピノザの社会哲学ーコナトゥスから救済へ、あるいはコナトゥスの彼方へー**
論文審査委員	（主査） 教　授　中岡　成文 （副査） 教　授　鷲田　清一　　教　授　山形　頼洋

論文内容の要旨

本論文は、スピノザ哲学のキーワードの一つであるコナトゥスを手がかりとして彼の社会哲学を解明しようと試みたものである。

まず第Ⅰ部「救済の存在論的基底」では、「限りにおけるコナトゥス」の概念の存在論的射程を強調しつつ、真の認識とは少数の賢人が神秘的営みにより到達するものではなく、より完全な認識への移行という要請の内で広がりと重層性、柔軟性を備えたものであることが指摘される。すなわち、コナトゥスの漸進的増大ということを認識の民主制と結びつけ、コナトゥスの存在論に社会哲学的位相を獲得しようとするのである。同時に、コナトゥスが定説により強調されるようなたんに自己存在への固執にすぎないものではなく、スピノザ自身が与えているある定義からしてすでに他者との協同を内包するものであると論じられる。

次に第Ⅱ部「感情の治療から救済へ」では、再度スピノザ哲学におけるコナトゥスの位置づけに焦点が当てられ、あたかも1つの個体であるかのような社会とは各構成員のコナトゥスが各構成員のもとにそのまま残る社会であること、つまり社会が構成員のコナトゥス（この場合は自然権とイコール）を完全に吸収してしまうのではなく、むしろ人々が一致し協力して社会（国家）の中に存在するときにこそ、個人のコナトゥスはより大きくなり、個人の存在はより安定的に保存されることが主張される。

さらに第Ⅲ部「コナトゥスと倫理」では、ヘーゲルのスピノザ批判を逆手にとる形で、有限様態の1つとしての人間が倫理の世界で主役を演じうるとの主張に基づきつつ、自己の利益は他者の利益と不可分であり、他者の利益を完全に無視した自己利益の追求によっては安定的な自己保存にかえって至りえないことを指摘する。すなわち、スピノザが想定している自己保存における自己は、閉鎖的・排他的な自己ではなく、一方では有限様態としての他者との関係によって（水平の因果性）、他方では絶対に無限なる神＝実体との関係（垂直の因果性）によってのみ存在し、維持される。さらに別の面から見ると、「コナトゥスの自己発展性とその必然性」がスピノザのコナトゥス理論の基本である限り、スピノザ哲学がいわゆるエゴイズムの原理から離れることは困難なようでいて、スピノザが目指した「理性人」が質的に転化されたエゴイズムによってかえって利他的行為をなしうる地平、理性人がエゴイズムの原理を超越する瞬間がかいま見られるのではないかと申請者は問い、これによって「コナトゥスの彼方へ」向かう可能性をわずかに示唆するのであるが、この可能性が人間の「本質」、「形相」の不変性からすると否定されなければならぬこ

とも同時に付け加える。

第Ⅳ部「救済の政治的位相」では、コナトゥスの大きさの相違が重要な論点となる。すなわち、万人がその現実的本質として例外なく与えられるコナトゥスそのものには大小・増減はないが、各個人がその現実生活において活動力能として展開する「限りにおけるコナトゥス」にはそれぞれアプリオリな変動の範囲が存在すると、申請者は主張する。

第Ⅴ部「安定性と救済」を経て、第Ⅵ部「コナトゥスの彼方へ」では、レヴィナスによるスピノザ批判が取り上げられる。レヴィナスは『全体性と無限』において、スピノザは分離ないし差異を全体性へと解消してしまい、彼のコナトゥス論には自己自身との一致についての疚しさが欠如していると批判した。申請者はこの批判に対し、スピノザにおいて有限様態としての自己は己に先立つ実体＝神からの働きかけ＝触発を待って初めて存在することや、「限りにおける神」とレヴィナスの「同の中の他」との比較可能性を指摘して、レヴィナスへの反批判の糸口としている。

論文審査の結果の要旨

コナトゥス論を軸にしてスピノザ哲学と対峙する本論文は、コナトゥス概念を基準にしてこそスピノザは形而上学と政治哲学とを整合的に扱いえたとみなすその構図において一貫しており、力強い。また、たんにスピノザを祖述するのではなく、現代的な問題関心に引きつけてスピノザ哲学をたんねんに、しかし批判的に読み込もうとする姿勢も、いくつかの新鮮で意欲的な提言につながっている。なかでも、有限様態である人間的自己の存在性の再検討から、近代西洋思想の１つの根幹をなす自己保存思想の見直しに踏み込んでいる（その結果、従来の常識に反して、スピノザをレヴィナスと比較可能な位置に置いている）こと、その過程で社会（国家）ないし共同性・共同態の成立要件をスピノザに従って幅広く考察していること、憐憫とは自己自身の苦しみの緩和をねらう点で一種のエゴイズムであるという指摘によって注目すべき他者援助論を提示していること、最後に日本の田辺元にまで目を配って、その「凄まじいコナトゥス解釈」を発掘し、これをも手がかりとして「コナトゥスの彼方」という方向性をしたたかに見据えていることなどは、スピノザ研究の枠を超えてより広範な哲学研究にまで有益な刺激を与え、貢献する可能性がある。

以上のような優れた成果にもかかわらず、若干の疑問点が残らないわけではない。上述の意欲的な提言のいくつかに導く論証に関しては、スピノザの存在論・認識論の基本位相に立ち返った上でさらに入念な確認を要する点が残ることは否めないであろう。とりわけ、本論文の中枢概念をなす間接無限様態の理解には問題がある。スピノザ哲学の汎神論的と俗称される特質から派生する基本的問題を現代的文脈で積極的に取り上げ、対峙しているその意図の壮大さは疑いえないしても、場合によっては現代的トピックを遠慮なくスピノザのテクストに外挿的に読み込むあたりは、若干恣意的な論理構成と映らないでもない。その他、社会哲学の諸問題の扱い方、ヘーゲルのテクストの用い方などさらに研鑽の余地は残っており、またレヴィナスの vulnérabilité の絶対的受動性とスピノザの imitatio affectu の受動性の比較は、似て非なるものの比較である。

しかしこれらの問題点は、スピノザ哲学の基本的な問題設定と論証デザインそのものに起因するものも多く、それらを真正面から果敢に引き受けて現代に通じるスピノザ社会哲学の意義を解明しようとした本論文のすぐれた成果を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。